

在留邦人のベルギーでの教育・生活に関する現状と課題

— 意識調査・学校評価を通して —

前ブラッセル日本人学校 教頭

島根県雲南市立掛合小学校 校長 山 根 毅

キーワード：教育の機会均等，意識調査，学校選択，学校評価

1. 背景・現状

ベルギー国内の在留邦人の子女が教育を受ける場合、どのような考えで、またどのような経緯で、学校を選択するのだろうか？ 現地における学校の実態は、重要な問題であり、学齢期の児童生徒を帯同する海外駐在員の多くの方がこのことで、悩んでいるのではないと思われる。

ブラッセル日本人学校の児童生徒の多くは、在籍後、2・3年を過ごし、生活に慣れた頃には帰国をしなければならないケースが相当数ある。また、両親のうち片方がベルギー人（片方は日本人）であったり、ベルギーで会社経営等を行ったりしている方の子女は、現地校を選択している場合が多い。

したがって、「ベルギーにおける日本人社会」の中の、短期滞在者と長期滞在者（永住を含む）の間では、学校の実態、日常生活の過ごし方、意識などに違いがあり、多様な価値観、生活行動様式等が見られる。

そこで、全日制日本人学校保護者に対し、ベルギーでの学校教育、生活等に関するアンケートを行い、家庭の教育方針、学校選択に対する考え方などを調査した。

2. 調査の目的

- (1) 学校の特色・教育方針を、保護者がどのようにとらえているのかを知る。
- (2) 保護者・児童生徒が、ベルギーでの学校選択をどのように行っているのかを知る。
- (3) 学校教育への期待感、満足度などを探る。
- (4) 調査結果をもとに、学校経営について見直し、今後に生かす。

3. 調査の主な内容（アンケート）

- | | |
|----------------------|------------------|
| (1) ベルギーでの滞在期間 | (2) 学校の選択理由 |
| (3) 学校の教育方針の理解度 | (4) 教育に関して心配なこと |
| (5) 子どもに望むこと | (6) 学校への期待や要望 |
| (7) ベルギー生活で、不便に感じたこと | (8) ベルギーのよさを感じる点 |

4. わかったこと

- ①滞在予定期間は、3～5年が最も多い。
- ②現在の滞在期間は、1～3年が最も多い。
- ③日本人学校を選択した理由は、「日本と同等の教育が受けられるため」「正しい日本語を身につけさせるため」「帰国時にスムーズに転入（進学）できるため」などが高率であった。
- ④日本人学校を選択した際、子どもと相談をした保護者は、52%であった。
- ⑤相談の内容は、「日本人学校、現地校のどちらに行きたいかか意思確認」「それぞれの学校の特徴を伝えた」「日本人学校へ行くことか意思確認のみ」などが高率であった。
- ⑥現地校を選択した理由は、「幼稚園からそのまま通わせた」「本人の希望」などが高率であった。

- ⑦現地校を選択した際、子どもと相談をした保護者は、91%であった。
- ⑧相談の内容は、「日本人学校に変わることもできるがどうするか」「意思確認」などが高率であった。
- ⑨補習授業校へ通わせている理由は、「日本人としての基本的な学力を身につけさせるため」「帰国時にスムーズに転入（進学）できるため」などが高率であった。
- ⑩補習授業校を選択した際、子どもと相談をした保護者は、80%であった。
- ⑪相談の内容は、「補習授業校の役割の説明」「意思確認」などが高率であった。
- ⑫教育方針の理解度に関しては、「理解している」「おおむね理解している」を合わせると、96%であった。
- ⑬子どもの教育に関して心配なことは、「国語力の維持向上」「日本の学校と比較しての学習の進捗」「帰国時のスムーズな転入（進学）」などが高率であった。
- ⑭子どもに対して望むことは、「友だちを大切にしてほしい」「ベルギーでしかできないことを体験してほしい」「優しく思いやりのある子どもに育ってほしい」などが高率であった。
- ⑮学校に対する期待・要望は、「今のままで十分。感謝している。」「ベルギーでしかできないような経験をさせてほしい」「外国語教育をさらに充実させてほしい」などが高率であった。
- ⑯ベルギー生活の不便さは、「フラマン語（オランダ語）・フランス語が理解できない」「子どもの出歩き・外遊びが制限される」「時間や約束にルーズなことがある」などが高率であった。
- ⑰ベルギーのよさは、「人々の心の豊かさ・親切さ」「緑や公園が多い」「ゆったりとのんびりとした生活」などが高率であった。

5. 考察

(1) 滞在年数と学校選択について

- ・保護者の多くは、3年程度の滞在を予定している。また勤務を終えると、日本に帰国するケースが多い。
- ・兄弟姉妹を現地校へ通わせ、現地の子どもの触れ合いや語学教育の充実を大切にしている家庭もある。
- ☆3年間の滞在であれば、帰国後を考えると、日本人学校に転入することが一番の選択肢となる。
- ☆帰国の時期・タイミングは、企業によってさまざまであるため、学期途中での転出も多々ある。そこで、日本人学校の使命として、日本国内の学校の学習進捗と、できるだけ合わせるよう工夫する必要がある。
- ☆少数ではあるが、海外の国から国への移動（すぐに日本に帰国しない）もあるので、その際は、学校選択が難しくなる。基本的には日本人学校の所在する国への転勤であれば、日本人学校を選択する傾向にある。

(2) 日本人学校選択の理由と背景について

- ・日本人学校選択の一番の理由は、「日本と同等の教育を受けるため」である。
- ・在外にあっては、日本人の中で学校生活を行うことは、子どもにとって負担が少ない。
- ・日本人学校に在籍していれば、帰国時に、スムーズに転入（進学）ができる。
- ・日本人学校に通わせるのであれば、会社から授業料の補助が出るが、インターナショナルスクール等へ行かせる場合、授業料の保護者負担がかなり多くなる。
- ☆子どもたちの中には、不安を抱えて外国生活をしている場合も少なくない。そこで、日本と同等の教育環境が整っており、同等の教育を受けられる日本人学校へ転入学することは、多くの保護者から支持されている。
- ☆日本人学校は、授業料で成り立っている私立学校である。経営にあたっては、多くの日本企業からの援助を受けている。従って、子どもを日本人学校に転入学することが、保護者にとっても企業にとっても重要となる。

(3) 現地校選択の理由と背景について

- ・現地校へ子どもを通わせる保護者は、現地校で幼児教育をさせていたことの延長である場合が多く、子ども自身も、続けて現地校へ通うことを望んでいる。
- ・現地校へ通わせる場合、保護者は、子どもとの相談をきちんとしている。子どもの希望を大切にしている。
- ・現地校（インターナショナルスクール等以外）に通わせる場合は、金銭的な負担は少ないが、保護者自身のフランス語能力も必要になってくる。

☆ベルギー赴任に際し、幼児を同伴する場合は、日本人幼稚園に入れることも可能であるが、定員・費用の問題等もあり、現地の幼稚園に入れることが多い。保護者自身も、低年齢の子どもを現地校に入れることには抵抗が少ない。その子どもたちが小学校入学の年齢に達したとき、現地校への通学を続けるのか、日本人学校へ転学させるのかが悩みである。調査の中には、子どもの意思確認をきちんとしている実態が見られた。

☆子どもの中には、現地幼稚園の学年を終えた後、日本人学校に転入する小学1年生もいる。

(4) 補習授業校選択の理由と背景について

- ・補習授業校へ通っている子どもたちは、あくまでも現地校での学習が主である。
- ・それでも、あえて補習授業校へ通学させている理由は、日本語の能力を失わないようにするため、帰国時にスムーズに転入（進学）するため、日本人としてのアイデンティティをしっかりと持たせるためである。
- ・週6日（月～金…現地校、土…補習授業校）の通学は、子どもにとっても保護者にとっても負担がかかる。

☆補習授業校へ子どもを通わせる際は、保護者の考えを子どもに十分に伝える必要がある。また、子ども自身も、補習授業校へ行く意味合いをよく考え、納得することが大切である。

☆補習授業校の子どもたちには、補習授業校での学習が自分にとってどれだけ大切かを考えた上で、日々の学習に取り組むことが求められる。

☆週1回の補習授業校での学習では、十分に基礎基本が身につかないことが多い。家庭での復習にも力を入れることが大切である。その際は、保護者の支援が必要である。

☆補習授業校の教員にとっては、子どもの負担が少なくなるよう、学習内容・方法等の工夫をする必要がある。

(5) 学校の教育方針・学校への期待・要望について

- ・教育方針は、多くの保護者がよく理解している。また、理解した上でそれぞれの学校に入学させている。
- ・学校への期待・要望では、「今のままで十分。感謝・満足している。雰囲気が良い。」等の回答も多くあった。
- ・さらに、「ベルギーでしかできないような経験をさせてほしい。」「外国語教育をさらに充実させてほしい。」「個を大切にしたい、きめ細かな指導を望む。」「体力の向上を図ってほしい。」「日本と同等の教育を行ってほしい。」「日本についての理解・日本人としての資質の向上」等の回答もあった。

☆教育目標を理解し、教育活動に対して満足しているとの回答を多く得られたことは、教職員にとって大きな励みとなる。学校経営を行う上で、大きなプラス材料であると考えられる。

☆保護者の望むことは多種多様である。すべての要望を叶えることは、できないのが現状である。したがって、現在行っている活動を工夫すること、保護者の理解が深まるよう情報を発信していくこと等が重要である。

(6) 子どもの教育への不安・子どもへ望むことについて

・子どもの教育に関して心配に思っていることは、「国語力を維持し向上させること」「日本の学校と比較しての学習の進捗」「帰国時のスムーズな転入（進学）」などであり、海外生活が長い保護者ほど、その傾向が強い。また、本校の子ども以外に、比較をする対象がいがないため、学習進捗等に対する不安を感じる保護者がいる。

- ・帰国の際、本校ではあまり実感できないようないじめ等の不安を感じている保護者もいる。
- ・子どもに対して望むことは、「友だちを大切にしてほしい。」「ベルギーでしかできないことを体験してほしい。」「優しく思いやりのある子どもに育てほしい。」「素直で明るく、元気に育てほしい。」などが高率であった。学力よりも、人間関係や海外生活の利点を生かすことを重視している保護者が多いと感じる。

☆学校から一歩出れば、フランス語やフラマン語（オランダ語）、英語の世界である。このような中で、国語力を維持・向上させるためには、日々の国語の時間を充実させ、校内での言語環境を整えることが大切である。また、保護者へ協力を依頼し、家庭学習も大切にすることが必要である。

☆国内の正確な情報をつかみ、適切に保護者へ伝えていくことが大切である。特に、進路指導に関しては、教職員が協力し、進学先である各地の情報を正確に伝えていくことが重要になってくる。

☆ベルギーでしかできないことを子どもに体験させるには、保護者自身が少しの勇気と判断力を持ち、自身で努力することが大切である。また、日本人社会から外へ目を向けてみることも必要である。

(7) ベルギー生活に関して（よさ・不便さ等）

- ・ベルギー生活で不便に感じることは、「フランス語・フラマン語（オランダ語）が理解できない。意思疎通が十分図れない。」「子どもの出歩き・外遊びが制限される。」「時間や約束にルーズなことがある。」などである。
- ・ベルギーは、治安はあまりよくないと言える。したがって、子どもだけで出歩くことは難しい。
- ・ベルギーのよさとして、「人々の心の豊かさ・やさしさ・親切さ」「ゆったりとのんびりとした生活」などを感じている。日々の生活の中で、すぐに手を差し伸べてくれるベルギー人の優しさ・温かさを肌で感じている。
- ・異文化にふれることで、日本国内でとどまっていたは味わえない体験ができ、広く豊かなものの見方・考え方に変わっていくような面も見られる。

☆日本人学校と家庭の往復（ベルギーにおける日本人社会の中だけでの生活）だけでは、ベルギー生活を楽しんだり、ベルギーの人々と交わったりすることは不可能である。

☆子どもたちの英語やフランス語の能力が高いにも関わらず、実生活で生かすことが乏しいように感じている。

☆上記のようなことから、保護者がベルギー生活に溶け込むような努力をする必要がある。また、子ども自身も、スポーツのクラブ活動に率先して入るなど、外に目を向けることが重要である。

☆ブラッセルで生活を行っていく上では、フランス語が重要である。多くの保護者は、フランス語や英語を習っている（会社によっては配偶者の語学研修に対し、補助金の制度がある）。しかし、2～3年という短い滞在期間で、フランス語でベルギー人と意思疎通を図るには、相当の学習量と強い意志が必要である。

☆これらのことを実行するためには、語学の習得が大切なのは言うまでもないが、好奇心・冒険心・探究心など、自分自身が外に目を向けようとする意識も必要になってくる。

6. 今後の課題と展望

ベルギーに赴任することが決まり、現地での子どもの教育をどうするかで悩んでいる保護者は多い。幸い、ベルギーには日本人学校と補習授業校があり、日本と同等の教育を受けることができる。全日制日本人学校には、約400名の児童生徒が在籍し、在留邦人からは多くの期待が寄せられている。

日本人学校への在籍期間は、2・3年が平均であり、保護者は、日本国内の教育の動向を意識している。調査からもわかるように、学校に寄せる期待として、「国内と同等の教育を行い、学習内容を充実させてほしい。」ことが一番に挙げられる。具体的には、「日本国内と比較して、学習内容は適切か、進度の遅れはないか、友好的な友人関係が築かれているか」など、帰国後を意識して、子どもを通学させていることがうかがえる。今回の調査を通して、日本人学校の役割、学校への保護者の期待等が明らかになった。安心して日本と同等の教育を受けられるよう、今以

上に、教育環境の整備に努めることが大切である。さらに、保護者への要望等に耳を傾けたい。

今回の調査のまとめとして、次のことについて今後の課題としたい。

- ①子どもたちが、日本と同等の教育を確実に受けることができるようにするための校内の体制づくり
- ②基礎基本の確実な定着を図るための指導法・指導技術の検討（特に国語力の充実）
- ③日本人学校の役割・使命を確実にかつ誠実に果たすための学校経営方針の確立
- ④日本人学校の役割・使命についての教職員への確実な伝達・指導
- ⑤学校経営方針を確実に保護者に伝えるための手段・方法の検討
- ⑥何でも気軽に話すことのできる教職員間（職場）の雰囲気づくり
- ⑦保護者が、気軽に学校に相談できる校内の体制づくり